

## オーバーラップ

長崎大学大学院医歯薬学総合研究科

発生分化機能再建学講座

小児顎口腔発達管理学分野 細 矢 由美子

もう20年も経ってしまったのですねー。

20年というと日本人の平均寿命の約1/4ではないですか。人生の1/4を九州の地で会員の皆様と楽しく過ごせたとするべきか、はたまた浪費してしまったとするべきか、想いは複雑です。

日本小児歯科学会九州地方会は、私が長崎大学に赴任して参りました年に設立されましたので、長崎大学での思い出とついついオーバーラップしてしまう所がございます。

第一回大会は、福岡歯科大学の先生達による手作りの学会でした。以来、九州地方会に参加する度に、福岡歯科大学小児歯科の伝統である暖かい心遣いに触れる楽しみを、甘受させていただいております。鹿児島大学が担当の時は、いつも僻地に隔離され、おかしかったですね。特に指宿に監禁されての大宴会は、大会史上に残る迫力物でした。また、恒例のソフトボール大会と演芸大会は、会員の運動神経と芸術（??）性が試される場でもありましたが、毎回懲りずに以外なスターが誕生し、珍プレーや珍芸に悩まされたのが実に愉快でした。学会発表以外の場でも多くの方々と知り合う事が出来、ずーっとおつき合いさせていただいておりますが、これまた“素晴らしいー!!”の一言です。

社会でも大学でも、物事を数値に置き換えた結果論が優先し、“おおらかさ”を堪能できるセンスと余裕が無くなって参りました。人生通して偏差値に支配される受験生みたいになってしまっは、医療の本質は成り立ちません。九州の地で九州の人々が作りあげてきた良き伝統と感性とを、九州地方会の場でも存分に生かしていただきたいと願っております。

## 地方会20周年に寄せて

鹿児島市開業 堀 川 清 一

今、手元に一冊の古びた冊子がある。わずか13ページのその表紙には「日本小児歯科学会九州地方会・設立総会及び第一回学会」と記されている。当時鹿児島大学の医局に在籍していた私は、同僚の車で、途中生駒高原のコスモス畑に寄り、まだ完全開通していなかった九州自動車道を北上して学会に参加した。地方会らしくアットホームな学会は、同時に先取の気運を持ったアカデミックでかつ熱気にはらんだものであった。担当講座であった福歯大の吉田穰教授(当時)が、一般講演に対する質問の中でリコールの重要性を力説された事は今でも鮮明に覚えている。ちなみにその時の準備委員長が、現本川渉教授であった。学会翌日の親睦ソフトボールは、それからしばらくの間、恒例のものとなっていったこともよい思い出となっている。また懇親会では、第4回の鹿児島大学

が担当してグリーンピア指宿で行われた愉快的(恐怖の?)ショーは、今でも語り草になっているのではないか。

九州地方会が発足してこの20年間、小児歯科に限らず歯科全般が、社会的な背景を含めて大きく変化してきた。この変革は今後ますます加速していくことだろう。今我々にできることは、そしてしなくてはならないことはその変化に確実に対応していく事ではないだろうか。もちろん、子供たちの健全な成長・発育に寄与するという使命感を持って。

## 設立20周年に寄せて

九州歯科大学小児歯科学講座 牧 憲 司

日本小児歯科学会九州地方会設立20周年を迎え、心よりお祝い申し上げます。

毎年行われる地方会の大会の内容が、年々充実したものになっているのは、各大会会長を初めとした関係各位の並々ならぬ御尽力の賜物だと思います。九州の地における本学会の意義は益々重要になってくることを確信しております。

私自身のことに関して言えば、学会発表の最初の方がこの地方会での講演でした。非常に緊張し、質問の意味を若干、取り違えたのを記憶しております。その後本会での数度の講演を経験し、発表のノウハウを学んだように感じます。

また懇親会で多くの先生方と臨床、研究、教育などについてざっくばらんに会話できるのも大きい楽しみの一つですし、長崎や鹿児島など風光明媚の地で学会をたびたび開催できるのも九州地方会ならではのでしょう。

少子高齢化社会の到来とともに、小児歯科を取り巻く環境は非常に厳しいものとなっております。変革の中にある大学における小児歯科の立場も微妙であります。しかしながら「小児～成人～高齢者」と言う縦割りの中での小児歯科の学問的重要性は、何ら変わることはないと思います。大学人としてノイエスのある研究を心掛け、臨床に常にフィードバックできるよう努めていきたいと考えてます。また実質的に大学の講座の垣根を超え、小児の健全な口腔育成に多くの Suggestion が求められるような体系作りが、さらに必要になってくるのではないのでしょうか。